

婦人子ども

第十四卷
第一號



大正三年一月五日

フレイベル會

第十四卷第一號目次

幼稚園教育の普及的必要

中川謙二郎

保育入門 (一)

倉橋惣三

一、幼兒の生活

美及び藝術

菅原教造

『トムソーヤ』

岡田みつ

子供の衛生

石塚保吉

幼稚園日記 (一)

田中生譯

フレーベル自傳 (第一回)

倉橋惣三譯

本誌定價

一冊 郵税共金拾壹錢 六冊前金郵税共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件をも含む)の御手紙は
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事務所宛
會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、
雨森劍宛
本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正三年一月四日印刷
大正三年一月五日發行

編輯兼發行者 倉橋惣三
東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四番地

印刷者 東京市本所區番場町四番地 登

印刷所 東京市本所區番場町四番地 井

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地
フレーベル會

謹
賀
新
年

フ
レ
ー
ベ
ル
會

フレイベル會規則 (抄)

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク
 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ獻出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一、總會、毎年十月之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育參考品、幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

一、當會、毎年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス

尚毎年四月廿一日特ニフレイベル紀念ノ爲メ會ヲ開ク
 一、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス
 一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス
 一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

本會々長

中川謙二郎

本會幹事

(イロハ順)

井村 くに 池田 トヨ 芳賀 晴

坂内 ミヅ 和田 實 和田 くら
 武井 綱枝 岡部 やす 倉橋 惣三
 安井 哲 福田 ふく 小向 きみ
 雨森 劍 坂井 ふで

本會評議員 (イロハ順)

乙竹 岩造氏 吉田 熊次氏 田中 ふさ氏
 野口 幽香氏 横山 榮次氏 藤井 利譽氏
 下田 次郎氏 日田 權一氏

本會客員 (イロハ順)

伊澤 脩二氏 巖谷 季雄氏 岩谷 英太郎氏
 波多野 貞之助氏 細川 潤次郎氏 本間 辰藏氏
 戸野 周次郎氏 大瀨 甚太郎氏 奥 好 義氏
 尾田 信忠氏 大久保 介壽氏 嘉納 治五郎氏
 唐澤 光德氏 谷 本 富氏 高島 平三郎氏
 棚橋 源太郎氏 多田 房之輔氏 田中 敬一氏
 中島 力造氏 中村 五六氏 野尻 精一氏
 野上 俊夫氏 黒田 定治氏 久留島 武彦氏
 松本 亦太郎氏 松本 孝次郎氏 馬上 孝太郎氏
 富士川 游氏 小西 信八氏 淺岡 一氏
 雀部 顯宜氏 櫻井 光華氏 三島 通良氏
 篠田 利英氏 東 基 吉氏 瀬川 昌耆氏
 尺 秀三郎氏 菅原 教造氏



第十卷第一號

幼稚園教育の普及的必要

會長 中川謙二郎

世の中に、いろいろ大事なものがあるが、澤山あるが、國家の將來を考へると、どうしても子供ほど大切なものはないのである。いふまでもなく、子供に對しては、家庭に於ても十分の保護を加へ、學校に於ても、また國家に於ても、十分の注意を怠つてはならないのである。即ち、社會全般が、子供を尊敬し、愛護しなければならぬのである。

幼稚園は、子供が家から出で、社會生活に入る第一門である。生後二三年を経て、子供が近處の友達と遊ぶやうになると、そこに社會生活が始まるのである。即ち幼稚園時代が、人間社會生活の始まりであつて、人生に於てよほど大切な時期である。

此時代に、單に家庭だけの教育では、子供が社會生活を學ぶ事が出来ぬから、此點から、是非幼稚園、または、之に類似の設備のもとに子供の最初の社會生活をよく教へ導かねばならぬのである。此意味に於て、即ち、子供の社會生活の始めに於て、特別な訓練を行ひ、心身發育の爲めに十分の保護を與へるといふのであるから、幼稚園教育は性質上普及せしむべきものであつて、決してある一部の社會に限られ

たものではないのである。

我國に於ては、歴史の然らしむる處か、とかく幼稚園を贅澤視するやうである。「私共は、幼稚園にあげる身分ではありません」などと云ふやうな事をしばしば耳にするが、是等は、幼稚園教育の眞意がよくわかつて居ない處から起る誤謬であらう。

どうか、幼稚園教育が、國家發展の爲め、眞に大切なる理由が、今少しよく了解せられたいものである。

家庭教育がよくゆきとどくならば、或は幼稚園教育は無用であるといふやうな事も云ひ得るかも知れぬが、しかし、今一歩進んで考へれば、前にも述べた如く、家庭だけでは、子供を、社會生活の基礎の上に教育する事が不可能であるから、幼稚園教育が必要になるのである。

現今、我國で大多數を占めて居る中流以下の家庭が、子供に向つてどれほどの注意をはらつて居るであらうか。多くは子供を面倒がつて、子供に

さまたげられて、甚しきは「此の餓鬼めが」などとあくたいをついて居るのではあるまいか。勿論、中流以下の社會に於ては、生活に追はれて居るのに、子供に母の仕事の邪魔をせられる事は、最多いのであるから、一々之をとがめるのは酷である。されば、どうか、かゝる母親にかはつて、必ずしも、幼稚園でなくても、幼児預かり所といふやうな、之れに類似の設備を以て、母親の仕事も十分に出來、子供の教育も十分に注意するといふやうにしたものである。

學校の方から云へば、幼稚園教育は、學校教育の準備であるから、之を普及せしむれば、學校教育の上に、著しくその効果のあがるわけである。然るに現今の状態にては、小學校と幼稚園の關係がよくつゞいて居ないので、幼稚園教育を受けた兒童は、この點はよいが、あの點がわるい、むしろ、幼稚園はなくてもよいなどと、想像的、または、妄像的に云ふて居る人もある。之に依つて本

邦の幼児教育思想の幼稚なことが表明せられるのは遺憾なことである。

要するに、幼稚園教育は、國家將來の爲めに、甚だ、大切な事業であるから、或種の社會に限らるゝ事なく、一般に普及せらん事を希望に堪へな

保育入門 (一)

一 幼児の生活

一

子供の生活を觀察するのに二つの見方がある。

『また發達して居ない』といふ點からの見方と、『既に之れだけ發達して居る』といふ點からの見方とである。勿論、此の二種の見方は、どちらの見方によつた處で、事實の實際に於ては別に變りのある譯ではない。假令ば今年三歳の子供を、まだ四歳にはなりませんと言つた處で、もう三歳になり

のである。

幼稚園の方でも、如何にせば、最よく兒童を發育し、愛護し、學校教育の最よき準備となるべきかを、精しく研究せん事を切望するのである。

倉橋惣三

ましたと言つた處で、事實三歳たることに於て何等違つたことを言つて居るのではないと同様である。しかし、見方の違いとしては、明かに區別することが出来るのである。而して假りに消極的積極的の見方と名づけて置く。ところで、吾々は日常平生、此の二種の見方の中、いづれによることが多いであらうかと考へて見ると、殆んど常に、消極的見方の方によつて居ると言つてもよい。即

ち『まだ發達して居ない』といふ方の見方を採る

のである。坊やはまだ奥歯が生えない。坊やはまだあんよが出来ない。坊やはまだ何を知らない。

といふ風である。之れを積極的の見方によつて、

坊やは既に門歯が生えた。既に立つことは出来る。

既に之々のことは知つて居ると言ふ人は却つて、
のである。勿論、子供の生活は發達であつて、

發達は將來を期待するものであるから、待ち遠き

發達に對して、まだくといふ感の起るのは情と

しては無理からぬことである。所謂、匍へば立て、

立てば歩めの親心といふのが茲のことであらう。

しかし、發達の事實そのものからいへば、大きい

到達と共に小さい到達にも價値を認めなければな

らないのである。わけても、人間の精神の發達に

於ては、自然に追ふて進まなければならぬ順序、

各時期といふものに、夫々大切なる特殊の價値の

存するものである。將來も貴いが、それくの現

在にも貴重な意味があることを考へなければなら

ない。

子供の生活の觀察が、消極の見方に偏し易いと

いふことは、吾々の日常平生に多いばかりではな

い。子供の生活の正しい觀察を以て其の生命とす

る教育に於ても、屢々同様のことが起る。少くも

古い教育に於ては、常にこの方が主になつて居た。

但し、子供の取扱ひを誤りなからしむる爲めに、

斯ういふ消極的見解による警戒、注意。言ひ換ゆ

れば超えてならない限度を與へるといふことは、

今日に於ても最も大切なことである。彼の子供に

對する過度の要求、不相當に高級な取扱ひ、無理

な速成、といふ類の弊害の往々にして生ずるのは、

却ち此の消極的見方による觀察が明でないための

結果である。そのために、近世の兒童研究は、そ

の正確なる知識によつて、之等の『教育上の不相

當』の害を除かうとする處に大いなる必要も、貢

献もあるのだと稱されて居る位である。

しかしながら、之れは教育上の顧慮である。誤

りなき爲の注意條件である。決して教育の出發點ではないのである。苟も子供の教育が行はれようといふには、その子供が現在どこ迄發達して居るかといふことを以て出發せられなければならぬ。言葉を換へていへば、子供の發達が此處まで來て居る。そこで其の發達を完成せしむる爲に、それ／＼の途が與へられ、方法が提供せられなければならぬ。即ち教育が與へられなければならぬといふ順序になるのである。少くも、そこに始めて最も自然なる、最も適當なる、従つて最も有効なる教育が行はるのである。而して、之れが爲には、積極的の見方によつて子供を知ることが必要になつて來る。

子供が茲まで發達して居るといふことを知るによつて、始めて次の發達を適當に指導することが出来る。子供に斯かゝる自然の要求が熟して居ると知つた時に、始めて其の要求を正當に満足せしめ、以て其の發達の完成を期することが出来る。す

なほ、教育者は被教育者が『既に之れだけ發達して居る』といふことを、正當に、且つ一つでも多く知ることによつて、其の成功を期し得るのである。幼兒教育者は、幼兒の『まだ發達して居ない』點のみ見て居るのではない。況んや、自分の無智によつて、幼兒の發達を實際以下に見くびつて居る様なことがあつてはならない。昔から幼兒教育の成功者は、すべて、幼兒の生活に、多くの貴い力を見出し得た人々である。

二

子供が三歳乃至四歳に達すれば、可なりに多くのことが發達して居る。先づ其の感覺に就て見ようならば、總べての感覺が、兎に角其の機能を具へて居る。目は視ることが出來、耳は聽くことが出來、其の他味にしても嗅にしても、又は物が觸れたとか、痛いとか、温いとか、冷いかいふことにしても、外から或る刺激が來れば、それを感ずることは充分に出来る。それもやつと出来る

といふのではなくして、可なりの経験を重ねて居る。のみならず、其の感覺生活が單に受動的のものではなくして、頗る活潑に、能動的に、絶えず其の感覺を作用させて居たいといふ積極的な態度にまで進んで居る。其の感覺生活の活潑さに於ては、恐らく成人の想像するよりも強く盛なるものであらう。殊に、感覺生活を、それ自身に於て樂み、求むるといふ點に就ては、人間の一生の中、一番強い時期と言つてもよからう。成人に於ては、感覺は一層複雑な生活の材料として用ゐらるゝ場合が多いのであるが、幼兒に於ては、其の感覺を活かすだけに満足をもつて居るのである。

なかに、運動感覺と名づけられて居る處の、身體の運動に伴ふ感覺は、此の時期の幼兒の生活に於て、絶えず充分の満足を要求して居るのである。此の感覺は委しく言へば、關節や腱や、いろいろの部分によつて感ぜらるゝが、其の最も主なるものは筋肉である。即ち筋肉に何かの活動が興

へらるゝ時に起るもので、幼兒はたゞ受動的に此の感覺を経験するばかりでなく、之れ亦能動的に、自ら求めて此の感覺を活かそうとする盛なる要求を有して居るのである。その要求の強さは、無爲安居をもとむる成人、殊に老人の生活などの殆んど思ひもよらぬ程であると言つてよい。

此の活潑なる感覺生活は、もう一段進んだ活動を要求して居る。それは他でもない。單なる感受作用から、識別作用に進まうとして居るのである。假令ばたゞ色が見えるといふ丈けでなく、色の種類の識別に進み、更に赤とか黄とかの識別ばかりでなく、赤なら赤、黄なら黄の中の、所謂濃淡の識別に進み、それも粗大な識別から、次第に微細な識別に進まうとして居るのである。もとより色ばかりではなく、すべての感覺に通じて同様の發達を要求して居る。而して、これは、一段の識別に成功して、それが遂に容易になり、次の一段進んだ困難なる識別に移るといふ具合に、絶えず難

を追ふてゆくのであるから、すなはち幼児にとつては一つの試みとも實驗ともいふべきである。而して、なれたる活動には興味が失せ、新しい試みに興味の伴ふのは、何の場合にも同様であるが、幼児は、特に著しい欲求を以て、此の新活動をもとめて居るのである。即ち、幼児の感覺は存分なる活動と、識別とに於て、更に進んだ發達を遂げるの必要ある程度にまで、丁度到達して居るのである。

三

幼児の内的生活も、亦可なりに豊富なるものである。勿論、抽象の概念生活に於ては未だ不完全且つ貧弱なるものであるけれども、個々の具體的經驗は、生後三年乃至四年の間に於て、随分多種多數なることを幼児の精神内容として蓄積して來て居る。まだ整理せられては居ない。まだ系統がつけられては居ない。従つて幼児自らが自在に主裁し得る知識とはなつて居ない。しかし、此の三

四年間に於て幼児が收得し得る知識材料は、吾々が同年月間に於て新たに收得し得る分量に比して、比較し難き程大いなるものである。而して其の既有的具體知識は、尙ほ非常なる活潑を以て、續々と收得せられつゝある新らしき具體知識と、或は活潑に聯合し、或は自在に同化し、瞬時も停滯することなき觀念活動が行はれて居る。

而して、その活潑な觀念活動は、強い發表の要求となつて外にあらはれて來る。其の發表は、必ずしも自分の内部生活を他人に告げようとするのではない。たゞ、内に充つるものが外に溢路をもとむるのである。なほ自然の結果としては、其の發表によつて、内部の活動が益々促がされ、高められ、擴げられてゆくのである。

其の發表の道具となり手段となるものは、或は言語であることもある。或は描出であることもある。或は形の排列であることもある。或は形態の構成であることもある。乃至また身振動作である

こともある。いづれにしても、恰かも器内の水が外へ流出をもとめ易いと同じように、幼児の精神内容は外へ向つて盛に活動をもとめる。而して其の活動や決して無秩序、亂雑でなく、印象としては假りに無系統に入つたものでも、發表としては自ら何等かの組織を立てる。但し、組織的發表を完ふする爲には、たい發表の要求のみでは充分にゆかない。他に種々なる、組織力の練習が必要である。すなはち、幼児は、その強い要求に基く發表に存分の機會便宜が與へられ、且つ、其の發表の組織に就て練習の指導を與へらるゝことを、今方に期待して居るのである。

次に、もう一つ幼児の著しい欲求の一つは、遊びな^{かま}の欲しくなつて居ることである。孤獨を嫌ふといふことは、或る意味に於ては、生後殆んど直に存することである。しかし、半歳や一歳の嬰兒に、社交、共同生活の欲求といふ程のものは

ない。ところが丁度四歳前後になつて來ると、其の性情の發達が、斯ういふ方面にまで進んで來る。勿論まだ、青年期になつて初めて完熟するような複雑な微細な社交性があるのではない。其の性情の主調からいへば、大に個人的、單獨的なるものではあるが、父母、祖父母、すぎな食物玩具の他に、自分と同年齡位な仲間を求め、その共同生活を要求するまでに欲求が發達して來て居るといふことは、充分に認めてやらなければならぬ事實である。

共同生活の要求に達して居るといふことは、やがて、對人感情の或る發達があるといふことである。對人感情のあるといふことは、やがて道德生活の初まつて居ることである。道德の概念はまだない。自我の内省に基く高級なる道德的生活はまだない。しかし、具體的な道德的諸感情は、幼児の柔い心の畑に、其の萌芽を發しかけて居るのである。その種子の由來に就ては、暫く問はぬとして、發芽にまで達して居るといふことは、既に大

なる發達である。發達といへば莖の丈けの伸びたこと、花の咲いたこと、果實のなつたことゝのみ考へて居る人もあるが、それよりも、種子から發芽までの發達の方が、如何に大なるものであるか測られない。彼のたわいない幼兒の性情はこゝまで發達して居るのである。實にこゝまで發達して來て居るのである。而して、自らの強い發達力と共に、その發達を助けて呉れる適宜なる培養に向つての強い要求をなして居るのである。

五

以上、幼兒の生活の全體に亘る記述でないこと

美 及 び 藝 術

(本誌前卷連載「美學講話」の結論)

文學士 菅 原 教 造

は勿論である。簡單なりといはるゝ幼兒の生活も、研究次第で、あながち簡單なものではない。しかし、上述の如き概觀略説によつても充分に分ることとは、幼兒の生活が明かに或る程度までの——實はなかく大なる——發達に達して居て、その發達に基き、又その發達の爲に、多くの貴重なる強い要求を有して居るといふことである。更に、言ひ方を換へて言へば、幼兒の生活は、諸方面の教育を與へらるべく、待ち設けて居るといふことである。

只今迄研究して參りました通り、美術經驗は實に多種多様な客觀的條件のもとに現はれるもので

あります。藝術の各書類は客觀的條件の重大なる相異點を代表して居るのみならず、一つ一つの藝

術品はそれ／＼變つた美的經驗を成すものであります。併しそれにしても猶、さう云ふ各種の經驗中に或一致點を見出し、それ程違つてゐる美しい物と物との間に共通點を見出す事は不可能ではありません。さう云ふ點を捉へれば、そこに美の一般に通ずる概念が成り立つのであります。併しこの普遍的概念の評論に取り懸かる前に、其の經驗は當然美的と考へて好いもの、其の對象は常に必ずしも嚴密なる意味に於ける美とは云へぬ二種の經驗について一言する必要があります。それは即ち崇高と滑稽とであります。崇高にも滑稽にも形式的古典的な美の見解とは一致せぬ要素がありますが、此の兩者共に他の美の見解では美と認められて居りますから、此處に簡單に其の性質を述べた方が宜からうと思ひます。

崇高の性質

パークは其の「崇高と美」の論中に、「美を樂し

むのは愉快を與へるものを樂しむ事に基いて居るが、崇高を悦ぶ方は、恐懼畏怖の感を起させるもの、苦痛及危險を思はせるものを悦ぶ事に基いて居る」と區別して居ります。カントも亦美と崇高とを相對せしめて、崇高は形式的、感覺的及客觀的方面よりも、主觀的方面に多く訴へるものでありと申しました。一般に崇高の客觀的條件は壯大を含んで居るといふ點は認められて居ります。其れが空間的廣袤の宏大でも、時間の長さでも、肉體的又は精神的力の大いさでも何でも關はないのであります。自然の或景は建築物と同様、壓迫的な大きさと力と時間との印象を與へます。又精神力の壓迫的印象を悲劇から得る事もあります。觀察者の反應は恐怖及讚嘆の反應であると説明される事もあり、又觀察者が崇高なるものに對して同感的鑑賞を感じて行く時の高潮した力の感じの反應であると説明される事もあります。此の二つの場合は強い對照をしては居りますが、兩立し難い

ものではありません。實際最初の恐怖の身震ひは、人が対象と合致する時に感ずる昂揚の感情に必要な条件であると思はれます。近世の人は宏大、莊嚴及力等の要素を美と認めて居ります。勢力若くは力は美の全體では無い迄も、近代の説で其の大部と看做されて居る彼の特徴美の重要な部分であります。

滑稽の性質

滑稽の経験は如何なる叙述的又は説明的定則をも與へる事は出来ぬと云ふ説をもつ人もありますが、それが出来る主張す學者は特に次の數點を擧げて居ります。即ち主觀的には滑稽の経験は通常徴笑又は哄笑の伴ふ愉快なものであると云ふ事又これは「下降的不合宜」を包含する或物より他の物への推移であり、且ホツとした様な感じに伴はるゝものであると云ふ事等であります。カントは「哄笑は緊張せる豫期が虚無に歸する時の突

然の變化に起る感情である」と云ふて居ります。又滑稽の経験には何事か新奇な若くは唐突なものを知覺せねばならず、或説に依れば觀察者の側に優越又は「突然の歡び」の感じが無ければならぬとも申します。有情滑稽の場合は機智ウイットと異つて、觀察者の感情が滑稽な物に對して暗に裡に注ぐ同情の爲めに、餘程和らげられて居ります。客觀的には滑稽は或對照又は不合宜を表示するものであります。

マトチンは滑稽を實驗的に研究致しました。其の材料には滑稽畫を使用し、其の方法は畫を調整せられたる條件のもとで觀察し、被驗者は其の面白さに準じて一枚々々それを類別し、其の内省を記録させられたのであります。其の結果繪畫の鑑賞を助ける模倣運動の傾向が一般に通じてある事が分かりました。畫中の徴笑して居る顔は見る人にも徴笑又は哄笑を催させて、それから其の繪に「をかしい」とか「面白い」とかの判斷が下されま

す。これをシェームスの論法でいきますと彼等は笑つたがために面白がつたのだと云ふ事になります。此外の重要な滑稽の要素は、新奇、快樂、對比、及び時には聯想、優越の感じ等でありました。マーチンは最後に六十人の被験者に、主な滑稽の學説を述べ、且與へられた繪を檢査して其の繪の經驗を最もよく説明して居ると思はれる學説を擧げさせました。するとシヨーベンハウエル説が一等多く擧げられました(五十回)。次に二人の被験者は六十枚の畫を見て、其の經驗と多くの學説とを比較致しました。この時も二人共に凡ての繪にあてはめる事が出来ると云つたのはシヨーベンハウエルの説のみでありました。其の説は「滑稽のものは必ず矛盾撞著的であり、其れ故に意外である。又或物を他方面から見れば別の概念のもとに包含されてゐるので、従つて哄笑の現象は必ずさう云ふ概念と、其の下に思考された實際の物との間、即ち知覺の抽象的對象と具體的對象との不合

が、突然分明になる事を意味して居る」。

滑稽の範圍は無論美的效果の一方面にのみ限られては居らず。舞蹈にも音樂にも眼に訴へる各種の藝術にも、文學にも(殊に戯曲に)表はれます。

滑稽を起す主な原因の一つ、即ち人情を突然、或は天真爛漫に發露する事に懸けては戯曲が一等勝れて居ります。

美の古典的見解

美は對稱、平衡、リズム、規正、釣合、約言すれば複雑多様の中に表はるゝ統一又は法則に依るものである、と云ふのがクラシックの美の見方であります。之は美の形式的又は客觀的方面に力を入れ、表現せらるべき感情よりも、藝術仲介物の通性及其の範圍の方を重しとして居ります。或永久に完全なものが其の目的であります。美學ではクラシカルなる名辭は敘述的名辭として用ゐられ、さう名付けられた物が他の物に比して優秀のある

意味では有りません。この概念は之を證して居る具體的作品を擧げれば直に分ります。建築に於ては希臘の寺院が古典的であります。それは希臘人が建てたからでは無く、規正、細部の全備、完全なる平衡及統一を示して居るからであります。音樂に於てはモツァルトの作品が和聲の純正と形式の的確との點から古典的であります。ダンスに於てクラシックの精神と合致するものは體操の要素であります。戯曲に於てはクラシックのは性格よりも脚色に重きをおきます、英詩ではドライデン、及びボープ、散文ではエデンンがクラシックの精神を例表して居ります。クラシックの最上の藝術品はマッコールが所謂「オリムピアン」質を備へて居ります。即ち安靜、完全、及び殊に法則の支配を表現して居るのであります。

美の浪漫的見解

美に對するロマンチックの考へ方では、其の主

觀的情緒的方面に力を入れて居ります。此の説に依れば藝術品の主な長處は其の表現性に在り、藝術は傳統に非ずして其の個有の感に情形式を支配させる事が出来る様に、傳統と獨立した絶對の自由を許さるべきである、と云ふのであります。此の派の藝術家は完全を目懸けず、興趣を目的として居ります。ロマンチックの傾向を示して居る物中には、ワグネルの歌劇、ドラクローア及多くの風景畫家の繪、バイロンの詩、ヴィクトル、ユーゴーの散文等が在ります。「ロマンチック運動」は近世の古典主義に對する反動で十八世紀に始まりますが、藝術に於けるロマンチックの傾向は此期に限られて居る譯ではありません。實際如何なる時代に在ても藝術製作上に、ロマンチックの分子の全然缺けて居る事は無いのであります。唯だ時代に依て一向目につかぬ事もありました。例へば希臘の藝術の如きは、クラシカルが一等勢を得て居る様に思はれますが、ベーターはロマンチックな

傾向もあつたと申して居ります。ロマンチック運動と相關聯して起つたのは「特徴美」の主義であります。但し此の主義の藝術の觀方は、ロマンチックのと同じであります。

藝術上の寫實主義

次に藝術上の寫實主義は、物事を「有りの儘に」描寫しやうとする企てであります。これは時としてロマンチック主義が示す誇張過實に反對であります。亦これはロマンチック藝術よりも、一層客觀的非人格的であります。併し「寫實」は往々經驗の細目を餘りにくどく描寫する弊に陥る傾があり、且斯く全體よりも局部にのみ力を入れ過ぎる點に於て、却てロマンチックに近い處があります、極めて範圍の狭い人生の一面のみ描寫しやうとするので、寫實家は最も氣儘なロマンチストと同じく極端に奔る危険があります。藝術の標準、若くは概念としては寫實主義も全く物になりませ

ん。これは只だ模倣的要素が極端に奔つたに過ぎないものであります。

特性及び特徴美

^{キャラクター}特性とは或人(若くは物)を他の人を區別するものであると普通思はれて居ります。これは確に區別をつけるものではありませんが、同時に其の人なり物なりに必ず伴つて居るもので、従つて其人若くは物の經驗には共通の要素であります。區別の目標としてのキャラクターは個性、又は普遍的のものと同別される不同の箇所を保證するものであります。俗に「キャラクター」と云へば變りの者の事を云ひます。又一方ではキャラクターとは不變的、類型的、若くは代表的のものと申します。或人は急性^{せつせつ}であるとか、落ち付いて居るとか云ふのは、或狀況に對して其の人は必ず或遣り方で反應すると云ふ意味であります。特にこれと云ふ譯もなく、彼人には「キャラクター」があると云へば、其人の

習慣中の或物に確固たる所、又は力がある、即ちアテになる人と云ふ事であります。斯の如くキャラクターには二ツの觀方があります。社會的集合の見地からすれば、これは固有不同のものであり、個人の立場から見れば、通有的又は不變的のものであります。國民のキャラクターもこれと同じ事では有りますが、それと例證する國民の中の多勢を考へて見れば通有的なものであります。

特徴美は或物の眞髓たる性質で、且其の特性を發露するものであります。特徴美を始めて藝術に必須の原則として主張したのはゲーテで、其のゴシック建築の辯護をした若い頃の論文が出てからであります。其の當時は「ゴシック」なる語は、蠻的、不秩序、無趣味、ゴテ／＼して居る意味に過ぎませんでした。これはゴシックが古代のクラシックの建物と違つて居つたからであります。然るにゲーテはストラスブルグ寺院を訪ねて、其の印象

の結果、美の觀方をもつと廣くして、自分の感じたる所を理論的に辨明しやうと致しました。ゲーテは美は形式的規正の要素と、特徴表示の要素と相結んで得られるものだと言きました。ゲーテの考ではキャラクターシックのみでは醜いことも有るかも知れぬ、が裝飾的の優雅と合致すれば最高の美を成すものであると云ふのであります。

併しクラシックをもロマンチックをも共に含むに足る位、キャラクターシックの範圍は廣いものであります。自由と個性の無い所にキャラクターも無いと同じく、調和と規正又は法則に對する隷従なくしては、キャラクターは存在致しません。藝術品は此の二ツの傾向を共に具體して居なければなりません(其の中どちらかの強い場合もありませうが)併しキャラクターシックと云へば、此の二ツの傾向を共に網羅して居ります。具體的作品に就て云へば、希臘の寺院もゴシックの伽藍も共にキャラクターシックであれば、モツァル

トもワゲネルもさうであり、ポーブもバイロンも共に又さうであります。

選擇と制限

藝術品をキャラクタリスチックなものとする過程は、即ち選擇及其の結果——排除——の過程であります。メロデイの話の時に調子は假令一ツ離して見れば如何に快いものであつても、チューンの輪廓を不明瞭ならしむるものならば、不適當であると申しましたし、又繪畫の所でも、或繪の細部が如何に正確でも奇麗でも全體のまとまりをわらくする様な所は缺點であると申しました。選擇、及其の選擇したを固守するのは必要な事ではありません。ラスキンはこのを犠牲の法則と呼んで居りますが、實際これは藝術家が醜いもの又は惜し氣のない物許りが、眞に美しい快いものですから自分の選んだものによし合はなければ排除する必要がありますから、確に、犠牲と申すことが出来ませ

う。アリストートルは「一定の制限」を秩序、對稱と共に美の要件の一ツとして擧げました。此の制限、又は有限の説に於て希臘人は今我々が「特質」フワイナイト若くは「キャラクタリスティック」と呼ぶ物の一面に觸れて居ります（希臘人に在ては「無限」なる語は悪い意味で、漠然とした、又は不定の物を云ふので、今日の無限とは違ひます。故に有限であるとか、制限のあるとか云ふ言葉は賞揚した意味でありました）材料の選擇及制限に依て藝術上得る所は、定められた範圍内で獲られる明晰、力、完全等を増す點にあります。裝飾美術はその第三延長を廢して了へば、圖案が明瞭になり、對象が強くなり、色の使ひ方が自由になります。彫刻は色を廢すれば純粹の形がよく出ます。音樂は調子を音階内に限るが爲めに、構造が一層明白となります。各藝術はそれ／＼特別の仲介物を持つて居ると云ふ事實に依て一定の範圍内に在るものであります。良い藝術品はさう云ふ制限を認め、且それ

を完全に受け入れて居るものでなければなりません。

藝術品としての人生

「生きる」と云ふ技術は絶高の藝術である、如何となれば、それは最も廣い材料の範圍と、最も雑多な、繊細な且持久的な活動の形式を備へて居るからである」とメイビーは申しました。すると此處に然らば人生と藝術品との間には一般的類似以上のものが有らうか、同一法則が兩方を貫いて居るか、又人生の範圍及變化は藝術のそれよりも多大であると云はれやうか如何か、斯う云ふ不審が起つて參ります。

第一に最後の問題から懸かりますと、著者は否と答へなければなりません。自分の生活を藝術品として整へて居る人は、色々の根源から引き出した經驗に基いてさうするのであります。併し大理石なり繪の具なり音樂の調子なりを使ふ人も、矢

張其の經驗の結果を藝術品に注ぎ込むので、後者の經驗の範圍が前者のそれより狭いと限る事は出来ません。兩者は共に同じ機會の範圍と、同じ人生の經驗とを持つもので、たゞその表現の方法が異なるばりであります。さうするとここに又、藝術品としての人生なる仲介物に對する疑問が起つて參ります。

是迄研究して來た凡ての藝術は人生なる藝術よりも便利な所があります、即ち彫刻にしても音樂にしても、それ／＼明白な一定の仲介物を持つて居る事でありませぬ。それには誰でも直ぐ認識し、且藝術家自身の不易の指導者として働く固定したる範圍、又は一定の論料があります。さて人生を一藝術品として眞面目に取扱ふ事になると、その獨特の仲介物と看做す事の出來る一定の條件を見出さなければなりません。藝術家は或四圍の中に住んで居り、或肉體的及精神的稟賦を持ち且社會的義務及制限の中に生ひ立つた者であります。

誰でも知つて居る通り。近世の社會組織は分業的で、人物なり型なりを専門的にする傾があり、その爲めに或職務をとる人は自然一層特殊的な四圍の中にはいりませう。斯く職業の選擇等に依て、意識的に活動を一方向に限つた人は、其の行動を藝術品にする第一歩を踏み出した者であります。如何となればさうして其人は自身の中に在るものを表現すべき一定の仲介物を受納した次第でありますから。所で職業、又は活動の型を仲介物とし、且其れを選んだ人を藝術家とすれば、其の人は如何なる方法で其の行動中に自身を客觀化し表現する事が出来ませうか。

若しクラシツクの理想に従ふ氣質の人であれば、自分の生活に秩序、均合、對象、平衡及細部の完成等を入れやうとしませうし、謹嚴で落ち付いて道理に叶つた行ひを致しませう。これと違つてロマンティックな人生觀を持つた人であれば、生活を表現的にし度いと望み、それが爲めに本能

及想情に驅られ易く、敢て危険を冒し、且成敗共に顯然たる傾向があります。趣味ある生き方をする人の目的は、常に何かキャラクターisticaな事をし度いと云ふ事で有ります。左様云ふ人々は寫眞主義者の様に細部に拘泥せず、大まかな暗示的な生き方を致します。又彼等は或程度迄其の階級又は職業の傳説に従ふ點に於て類型的であります。特種の境遇を認め且それに反應する所には飽迄固有獨特な點が表はれて居ります。

キャラクターisticaな人物の具體的な例の中から、マルティンルーテルとカーディナル・ニューマンを引きませう。二人共に宗教的で、眞面目で、共に有義な事業を爲し遂げた特徴的な人格でありました。二人は共に其タイプを強め、氣質を表出する境遇を見出し、それを受け納れたが故に藝術的であります。自分のタイプを認めてそれを鞏固に把持して終始それを發達させて行くのが此種の人の定則であります。世間には自分の理想を人か

ら貰つたり、又は餘り多方面の長點をとりすぎたりする人が多い様であります。始めの場合は純然たる模倣的性格が出来さうですし、次の場合には兩立し難い性格の長所を結合しやうとする一種のロココ型の人格が出来さうであります。タイプの混亂は藝術に於ても好ましくないと同様、人生に於ても避けなければなりません。希臘の寺院の上りにガールゴイルの這つて居るのを好いと思ふ人はありますまい、同じ譯でジョージ・ワシントンがリンコルの態度で逸話を話すのを聞き度いと思ふ人はなく、リンコルンがミニユエットの舞蹈が上手であつたと聞いても妙なものでありませう。ジエーン、オースティンに劍をとらせ度いと思ふ人も無いでせうし、ジャンヌダルクに風俗小説を書いて欲しいと望む人もありません。此の人々は銘々立怪に完成しては居りますが、それを混せれば奇怪なものになつて了ひます。さう云ふ區別を失くし且さう云ふタイプを混同したりするのは、

とりもなほさず人生の意味を失くすものであります。

藝術及び行爲

前項に人生は藝術品として見る事も取扱ふ事も出来、藝術の概念は直に人生にあてはめる事が出来ると申しました。然るに是のみならず、藝術家にとりては其の藝術が其のライフであつて、藝術が發展させる範疇及見解は、其の平生實際の經驗に對する時のと同じであります。併し又著者が各特殊の藝術を論ずるに當つて、絶えず人生と關聯して價值を説いたのも事實であります。藝術品の意味の由つて來る所は、吾々自身の有機體の過程即ち有機的及筋肉のリズムと模倣運動であるとして、常にこれらと參照する事にして參りました。即ち我々自身及肉體を究極參照すべき條件と認めて居つた觀があります。藝術が人生及行爲の範疇で判斷される事は、戯曲に於て殊に明瞭でありま

す。が戯曲には限らず凡ての藝術は皆特殊の人生の組織を示して居り、人生の範疇で判断せらる可きであるのは論ずる迄ありません。故に藝術と人生とは相互に批評の基點となる事が出來ます。

藝術と人生との異同を今少しく明瞭にしやうと致しますと、第一に兩者の理想の同一であるのに氣がつかます。人生の理想は倫理的理想又は行爲の理想と同一物であると著者は考へて居ります。

所で倫理上の學説は通常完全論者と快樂主義者の二つに分れて居ります。完全論者は品性の満全を期し、色々の徳が互に完全に適合して居るのを示し、且秩序、均合、平衡、就中法則への順應を表はして居る品性に達せんとするものであります。

快樂説は個人の感情に重きをおき、其の目的とする所は快樂と満足とであります。完全論者は活動の形式を重じ、快樂論者は其の内容、即ち其の活動の意義又は結果を重んじます。此の二つの倫理學説と、美に對するクラシック及ロマンチックの

説とは非常によく似て居ると思ひます。又美學の論にはキャラクターシックの説が有ると同じく、倫理學には自我實現の説があります。自我實現とは強い特殊の自我——法則（但しそれ自身の法則）に順應する自我——の發揮を意味して居ります。キャラクターシック説が、クラシック及ロマンチック何れの價値をも認めて居る通りに、此の自我の實現説完全論者、快樂主義者の何れをも價値ありとして居ります。理想の點のみで云へば、藝術の究極的理想と、行爲の究極の理想との間に相異を見出す事は出來ません。

然らば藝術と人生との相異點は何でありませうか。又兩者相互の位置はどう極めたら宜しいのでせうか。此の間に答へるには先づカントの哲學から始めなければなりません。

近代思想上の最も重要な問題は、カントが其の三批評中に精を集めて、定義を下しました。カントは自由意志の教義の要求と自然律の教義とを融

和させやうと致しました。其の著「純粹理性批判」中には、人は宇宙に於ける何物でも自然律の支配の下にあるとしか考へる事が出来ぬ、此の形に於てのみ、凡ての事は了解されるのである。自然又は必然は絶対に行はれてゐるもので、人の認識力の及ぶ限りでは、世界には如何なる自由も自發もあると云ふ證據は無い。故に行爲は自然律に依て定められる判がある。と云つて居ります。亦其の「實際理性批判」に於ては、カントは自由を信ずるの必要を説いて居ります。其の結論には、「合理的に且健全に生きさんが爲めには、證明は爲し得ぬ或假説を作らねばならぬ」、と云つて居ります。が、その實證は無くとも信せられて居るものの中には、神の存在、自由、不死等もはいつて居ります。人はかういふものを確實に證明でも爲し得るかの如くに行爲して居るものであります。實際的には我々は單なる必然のみで無く、人間の精神が人間の行爲を支配するのを感じますれば左

様あるものと決めても居ります。此の自然と自由との反對を融和すをために、カントは美的經驗を例に引きました。美的判斷に於ては、感覺の中に合理的な所が認められるものである、即ち自然律に定められた感覺印象は理性又は精神的法則と完全に融和して居るもので、美は感覺的なものであり乍ら合理的なものでといふのであります。後に出た學説は外の點ではカントと違つて居りますが、この藝術は人生の矛盾を修正する點に於て「何事か人生の爲めにする」ものであると云ふ意味は皆一致して居ります。即觀念を感覺に表彰するか、主體が客體に没入するか、人生の各傾向の調和とか、云ひ方は色々ありますが、皆藝術の緩和的性質を示して居るものであります。

扱藝術が人生に對してする事は、ヘンリー・ジェームスの言葉を借りて、藝術は「人生の心像」であると云へば一番好都合であります。

人生の心像

此の説に依れば藝術の人生に對する關係は、尙彼の經驗に對する心像の關係と同じことであります。藝術は其の意味を人生より得、人生は其の意味及理想の感覺的形式又は心像を藝術に見出す事は誰しも認めなければなりません。此の説は美を融和物とする説と完全に調和する事が出來ます、如何となれば、矛盾せる傾向を再整する道具は心像であると云ふ事は心理學の教へて居る所でありますから。

行爲の問題を人生の中心問題として論を續けますが、さて如何なる心像に依て行爲の或物は行はれるのでありませうか。希臘人は行爲の問題を平衡の問題として居りました。アリストートルは、凡ての行爲は兩極端の間の中庸であると考へました。徳の中で最も博い「正義」は、對稱及平衡の心像と最もよく合致して居ると私は考へます。道

徳的齊整は、感覺的に考へ得らるゝ秩序又は齊整の外觀を被せて考へられる事がよくあります。實踐道徳では、徳に美しい心像を被せて觀るのであります。無論我々は徳が社會的に必要なのを證明も出來ますし、合理的な結論として倫理的價值をも認める事は出來ますが、併し其の中に何等かの美を見出さなくては善行をする事は出來ぬと私は思ひます。之れは我々は生來不道徳なものであると云ふ譯ではなく、美は倫理上の理想に缺く可からざる一面であると云ふに過ぎないのであります。人に直接に感せられもし、理想に刺戟力を與へもするのは即ちこの美なのであります。

想像と經驗との關係を説明して藝術對人生の問題の結論と致しませう。想像の材料は經驗から參ります。即心像は其の再現状態に於ては經驗を模寫するものであります。併し建設的心像は最早模寫では無くて創造であります、さうなると心像に追隨し、又はそれを模寫するものは經驗でありま

す。藝術と人生との關係も斯の如く、兩者は相刺戟・相指導するもので、藝術が人生無くしては成

り立たぬと同じく、人生に取つても亦藝術は缺く可からざるものなのであります。(ゴルドンによる)

『トムソーヤ』

〓 英文學にあらはれたる子供(十三) 〓

東京女子高等師範學校教授 岡 田 み つ

前號の『ツェンニア』の續きを掲載する筈ですが正月の讀物としては少し陰氣で似つかばしくなく感ぜられますから一讀して失笑するやうなものと此一回だけ別のもをを挟みました、此『トムソーヤ』(Tom Sawyer)は近代有名の米國の滑稽家マークトエーンいたづらの書いたものでトムといふ惡戯少年の話です。

「トム！」

返事が無い。

「トム！」

返事が無い。

「彼あれ子は如何どうしたのでらう。こらトム！」

老女は眼鏡を下げて、其上から室内を見廻した。

其から眼鏡を上へ舉げて其下から見た。此老女は少年程の小さい物を見るに眼鏡で見た事はない。

といふのは其眼鏡ツていふのが他所行よそゆきの、御自慢の品で、見得の爲に出來てゐるので、實用の爲でないから實は煖爐ストーブの蓋ふたを目に當て、其から覗いても同じ譯なのである。老女は一寸怪訝な顔をして居るがやがて室内の道具に聞こえる位の高調子で忌々しさうにはないが獨語した。

「よし見付けたら最後、必然きつと……」

と言つて後あとは止めて終つた。實は、其時は、早く身を屈めて箒で寢臺の下を衝突つづいて居て、其方

に力が要^い用^つたからで、——但し突^つき出^だされたのは只猫一疋であつた。

「あんな子^こッたらありやしない。

と言つて、明け放^{はな}してある入口^{いりぐち}の處へ行つて立つて、其でも庭となつてゐる、トマトの木やジムソン草などの生えてゐる中を見渡した。トムは居なかつた。老女は遠^{とほ}さを見計^{はか}らつて、聲^{こゑ}を張^はり上げて、

「こら——トム！」と怒鳴^{いか}つた。

途端^{とつぜん}に後にコソリと音がした。老女が振り返ると、丁度一少年が逃げやうとする處なので、矢庭に、その着物の端を掴^{つか}んで引据^{ひきよ}えた。

「やれ！ あの押入^{おしり}を思^{おも}ひ付^ひきそ^うなものだつたに。彼處^{あそこ}で何^{なに}をして居た。

「何もしやしません。

「何もしない！ 手^てを御覽^{ごらん}！ 口^{くち}を御覽^{ごらん}！ 其は何だい？

「僕は知らない。

「私^{わたし}や知^しつて居るよ。ジャムだ。ジャムに違^{ちが}ひない。ジャムに手^てを出^だすと、非道^{ひだう}い目に遇^あはすと何遍^{なんべん}もく其方^{あつち}に言^いつたらう。其鞭^{むち}を御貸^{ごか}し。鞭^{むち}が空^{そら}間に閃^{ひら}いた。危機^{あやう}一髪^{いっぱつ}と見てとつて

「あら！ 伯母^{おば}さん後^{うしろ}を御覽^{ごらん}！」とトムが大聲^{おほこゑ}を上げた。

老女はくるりと振り向^{むか}いて、狼狽^{あわて}て裳^{つま}を撮^とんだ。其間^まにトムは一目散^{ひとま}に扉^{かど}を這^はひ上^あり、躍^とし越^こして逃^にげて終^{しま}つた。ホリー伯母^{おば}さんは、愕然^{ごつくり}して立つて居^ゐたが、小聲^{こゑ}に笑^{わら}ひ出した。

「ほんとに呆^{おろ}れた子^こだよ。私^{わたし}にや如何^{いか}して氣^きが付^つかないのだらう。あゝして始^し終^つ人^{ぢうぢう}を欺^{あざ}すのだから、私^{わたし}だつてよい加減^{かへん}に、前^{まへ}以^もつて其^{その}れが知^しれさうなものではないか。年寄^{としより}の馬鹿^{ばか}ほど大馬鹿^{おほばか}はないのだ。譬^{たと}にもいふ古犬^{ふるいぬ}に藝^ぎは仕込^{しこ}めずさ。だが、あの子^こと來^きたら、同^{どう}じ手^て段^{だん}を二^に日^{にち}と續^つけて出^でさないのだから今^{いま}度は如何^{いか}いふ手^て段^{だん}で來^きるか知^しれやしない。御^ごまけにあの子^こはどの位^{くらい}調^{てう}戲^ぎ

ふと、私が腹を立つつていふ程合を知つて居ると見えて、人に油断をさせたり、笑はせたり、勝手な真似をするから、つひ腹も立てず非道く打擲した事もない。あれでは爲にならぬ。眞實にどうも爲にならぬ。「鞭を惜んで子を害ふ」と聖書にある通りだ。私や罪業を積んで、あの子と二人分の咎を背負つて居るのだよ。悪戯一抔で仕様のない子だが、あれも死んだ妹の子だから痛い思ひはどうしてもさせられない。甘やかして置いては、濟まない／＼と氣を揉み、打てば打つて可哀さうで堪らないし。あゝまあ仕方がない。女から生れた者は、命短くして苦多しと聖書にも言つてあるから、そういふものなのだろう。あの子は今日は必然怠惰をするだろう。その罰に、明日仕事をさせなくてはならない。日曜日に仕事をさせるのは大骨折だけれど——他家の子が皆遊んでゐる時だし、御まけにあれば仕事の嫌な事一通りでないのだから。

併し、あの子の爲だから無理にもさせなくては。とんだ悪人に仕上げてしまつてもならないから トムは、怠惰休をして面白く遊んだ。夕食前に歸宅して、ジムといふ黒奴の少年が明日の薪を切つたり、焚付を割つたりしてゐるその手傳をするのに僅に間に合つた。いや、ジムが仕事を四分の三する中に、今日の出来事を話して聞かせるだけに間に合つたといふ事なのだ。トムの異腹の弟のシッドは、木屑を拾ふ役目を大方濟ませて居た。此子は穩順しくて、手数のかゝる子でなかつたら。トムが夕食を食べ／＼隙を見て砂糖を盗んでゐると、ポリー伯母さんは、トムが茫然引掛かつて、口を滑らすやうにと巧みな質問を試みた。伯母さんは單純な心の人にあり勝ちの、自分は深い策略が上手なのだとの自惚があつて、見え透くやうな手段を、世にも珍らしい深謀智略だと得意であるので。

「トムや、今日は學校でなかく暑かつたらう
「あゝ。」

「大變に暑かつたらう。」

「あゝ。」

「水泳にゆきたくなかつたかい。」

「トムの心は冷りとした。……疑念が萌して。伯
母の顔をじつと見たが顔色では何も讀めなかつた
で、トムは

「いゝえ、——なに、そんなにも思はなかつた」
と言つた。

「だが今はもう暑くはあるまい。」

と言つて、トムのシャツの乾いて居るのを發見
し、人には自分の心の中にある思惑を感付かせな
かつた手際に、伯母さんは我から感服してゐた。
併し、トムの方では、風の吹き工合を早くも悟つ
て、伯母さんの先を越して、

「水で頭を打たせた人もあつたよ。僕の頭は未だ

濡れて居る。ね、こら！」

伯母さんは、其點を見逃して居たのを口惜しが
つたが、新に妙計を思ひ浮べて、

「頭を水で打たせるのにやシャツのカラを外さ
なくてもよいのだらう。上衣のボタンを外して
御見せ。」

トムは、平氣の平座で上衣を開けた。シャツの
カラは、ちやんと縫ひ付けてあつた。

「ちよつ！ 宜いから彼方へ御出で。きつと意
けて學校を休んで、水泳にいつた事と思つたに。
勘忍してやるよ。御前は譬にいふ毛を焦した猫
だ。見かけよりも良いのだ、今日だけは。」

伯母は、やり損つたのが残念でもあり、トムが
どう間違つたか、善い行爲の方へ轉んだのが悦ば
しくもあつた。

處が、シツトが、

「でも、伯母さんは、白い絲でカラを縫ひ付け
たらうあれは黒いよ。」

「さうとも白い糸で縫つたよ。トム！」

トムは、一刻も愚圖／＼しては居なかつた。戸口から出がけに。

「シッド奴 打つてやる」ぞと言ひ捨て、立去つた。

安全な處へいつてから、トムは、上衣の垂れに刺してある二本の針を熟と見た。二本とも糸がくる／＼巻き付けてあるが、一本には白糸、一本には黒糸が通してあつた。

「シッドが黙つて居れば、伯母さんは氣が付きはしないのに。厄介だナ。伯母さんは白い糸でしたり、黒い糸でしたりするのだから。何れかに定めて置けばいゝに。とても番をして居られやしない。シッドの奴を打つてやらなくつちや。きつと懲らしてやる。」

トムは此村の模範児童ではなかつた。トムは模範児童の事はよく承知してゐた、大嫌ひなのであつた。其から二分も経たぬうちにトムは前の苦勞は忘れて終つた。その苦が大人の苦よりも輕いか

らといふのではなく、他にもつと面白い事があるからで、此際トムの心を奪つてゐたものは口笛のかはつた吹き方であつた。ある黒奴から教はつたばかりなので、緩くり何處ぞで吹き立てたくて堪らなかつたのだ。今しも彼は口から美音を注ぎ出して精神は大満足で、往來を流してゆくと、向ひから見知らぬ男兒がやつて來た。双方疾視合で喧嘩の吹つ掛つこをした揚句が、眞劍の擲合となつて、互に髪を搔る、衣服を裂く泥まみれになる、擲ち合ふ、引掻き合ふ、大混亂の眞中から、見る／＼トムが敵に馬乗りになつて、拳を固めて殴り付けてるのが明瞭見えて來た。組敷かれて口惜泣きに泣いてゐる子が「降參／＼」と苦しげな聲を出したので、トムはやうやく手を緩めて、

「様見る。こんどから相手をよく見てから、馬鹿にしろ。」

と言ひ放つて、意氣揚々と引上げた。

其夜、トムは晩く歸つて、窓からそつと這ひ込

むところを、圖らずも、伯母さんといふ伏兵に見付けられてしまつた。伯母さんはトムムの衣服の様を見て、明日土曜の休み日を家へ置いて、仕事を課さうとの心が巖いははの如く堅くなつた。

土曜日の朝になつた。夏の世界は、陽気で活氣が溢れて居た。人の心は浮き立ち、若い者などは歌ひ出す位。どの人の顔にも喜悅よろこびが見えて、歩調あしどりさへも踊るやうであつた。ローカストの樹は花盛りで、香氣芬々としてゐるし村の彼方あなたのカーデフ山は、綠鬱蒼みどりとして、丁度此處からは極樂の地かと思はれさうに、靜かに、夢のやうに、人誘ひ顔に聳えてゐた。

トムは、白ペンキのバケツと、長柄の刷子ブラシとを提げて、往來へ現れた。而して、板塀を見渡して、忽ち元氣銷沈して終つた。塀の高さが九呎長さが三十ヤードだ。あゝ、人生空漠、生存は唯之苦だと歎息しつつ、刷子をどつりぶ浸して、頂邊てつべんの板を横にすつと撫でた。今一度やつた。更に又一回

試みた。而して一條の白くなつた部と、目先遙の未だ白くなつて居らぬ部とを比較して、落膽がっかりしてトムは腰を下した。すると、ジムがバケツをぶら下げて、唄ひながら、門から跳ねて出て來た。トムは、共同ボンブへ水汲みにゆくのは厭いやな仕事だと思つて居たのが、今日はさうでもなく思はれた。ボンブの處には誰か相手が居る。白人、ミュラツト、黒奴、いろんな子供が、順番を待つ間休んで玩具の交換をしたり、喧嘩をしたり戯あそけたり、騒いだりしてゐる。ボンブは家から百五十ヤード位しか離れて居ないのに、ジムは一時間以内に戻つて來た例たがひがない。しかも通常誰か迎へに行くのであるなど、考へた末トムは、

「オイ、ジム！ 少し塗つてくれ。水を汲んで來てやるから。」

ジムは、首を振つて、

「駄目！ 御内儀かみさんが水を汲んで來いつて、而して誰とも遊んでゐてはいけないつて言つた

んです。トムさんが、塀を塗つて呉れといふだろうが、御前は自分の用をしろつて………御内儀さんが自分で塀の方の世話を焼くつて。

「御内儀さんの言ふ事なんぞ聞かずといよ。御定まりの言ひ草ぢやないが。そのバケツをよこせ、直ぐ歸つて来るよ。伯母さんに知れるもんか。

「いけません。御内儀さんに掴まれると打たれるから——きつと打たれるから。

「御内儀さんが！ほんとに打つかい！指抜きで頭をコツンとやる位じやないか。誰がそんな事を恐がるもんか。口先ばかり恐ろしい事をいふけれど、文句は痛かないからナ………だが泣かれると弱るよ。ジム、石弾をやろう。白めんこをやろう。

ジムは迷ひ出した。

「白石弾だよ。ジム——素的なめんこだぜ。

「やあ！素晴らしい上等のダ………だけれど

トムさん、恐いな、御内儀さんが………

「私の痛い足の指も見せてやる。

ジムは高が人間なので、とうとう抵抗が出来なくなつて、バケツを下ろして白めんこを受取り、トムがそろそろ足指の繃帯を外してゐる處を、夢中になつて覗き込んでゐた。が、忽ち痛い背中を抱へてバケツを下げて往來をひた走りに逃げて行つた。トムはトムで急に精を出して塗り出した。ポリー伯母さんは手に上靴を持ち、目に勝利の誇りを見せて、その場から悠々と引き上げるのであつた。

併し、トムの精力は長く續かなかつた。今日、爲やうと思つたいろくの遊びの事を思ひ出して、失望は百倍した。もう直に、用事のない友達が思ひくの遊びを志して此處を通るだらう。而して働かされてゐる自分を調戲ふに定まつてゐる——と思つた丈でも、身内が火のやうに熱つて来た。自分の財産を取り出して見るに、玩具に石弾

に芥^{かま}くたが少々。之では仕事の交換は出来るが、三十分の遊び時間を買ふにはとても不足^{たり}ない。と、トムは貧乏身上をポケットに納めて、友達を買収する計畫を思ひ切つた。此暗黒絶望に當つて、忽妙計が浮んだ。實に天外から落ちて來た奇想であつた。

トムは、刷子を取上げて、落付き拂つて、仕事をやり出した。ベンが向ふからやつて來た——トムは一番この少年の嘲弄を恐れてゐたのに、その當の主が來たのである。ベンの步調のピョンと跳ねシャンと飛ぶ風情を見ても心が軽く樂みは多いのが解つた。彼は林檎を噛りながら、折々好い聲で長く閑聲を上げては、太くチンドンドン、チンドンドンと言つて來る——蒸汽船の眞似なので、トムの近くへ來てからは、ベンは歩を緩めて、大道の中央に行き、右舷の方へ身を傾けて、重々しく船首を轉回させる。自分は汽船ミズリー號なので喫水九呎のつもりをやつて居るのであつた。船

と船長と機關とを一人で兼ねて、今や甲板に立て號令を出しながら、その號令を實行してゐる譯なのであつた。

トムは、汽船には目もくれず塗つて居た。ベンは一寸目を見張つて、トムに向ひ、

「ヤーイ！ 君は困つて居るのだナ？」

返答もせず、トムは技術家氣取りで、今仕上げた部分を鑑定し、また軽く一刷子渡してその結果を眺めて居ると、ベンは愈々間近く寄つて來た。

トムは林檎を見て欲しさに、口に唾が出て來たが、側目^{わきめ}もふらない。ベンが、

「オイ君。仕事をさせられて居るのかい。といふとトムは仰山^{ぎやうざん}にくるりと向いて、

「やあ君か。ちつとも氣が付かなかつたよ。

「あのね、僕は水泳にゆくんだよ。いゝか水泳に。君行きたくないか……併し君は仕事を
する方がいゝんだらう？——そうだなあ、君。

トムは、やゝ暫し相手を眺めて、さて、

「一體如何な事を仕事ツていふんだ。

「それ、それが仕事ではないか。

トムは、塗りながら無造作に答へて、

「さうかも知れない。が、さうでないかも知れない。とにかく、トムサウヤーといふ人間には、之が氣に入つてゐるんだ。

「フーン！ だつて、まさか君は其が好きだつていふのでも無からう？

「好きかツて？ 好かないツていふ譯もないではないか。僕等は塗りたいツたつて、毎日塀を塗るわけには行かないからね。

之で、忽ち事件が新方面を呈した。ベンは、林擒を齧るのを止めた。トムがすつ／＼と巧みに刷子を使ひ——一步下がては、その結果を眺め、ちよい／＼手を入れては又出來映を鑑識する一舉一動を、ベンは見守つてゐる中に、段々面白くなり、段々其に呑れてしまつた。

「あのね、君。僕に少しやらせて呉れたまへ。

トムは、考へて——承諾しやうとして又氣を換へて、

「いや、いや、だめだろうよ。ポリー伯母さんは、この塀の事はやかましいコンだもの。往來に向いてゐるだろう、ね裏の方のだと僕は構はないし、伯母さんだつて構はないんだが、この塀はやかましいンダ。氣を付けてしないと駄目なんだ。正當と不都合のないやうにやる人ツていふと、さうさ、千人に一人、ひよつとすると、二千人に一人もあるまいと僕は思ふよ。

「そうかなあ！ 併し、少し、ほんの、少し、僕にやらせて呉れ！ 僕が君なら君にやらせるのになあ。

「實際正直の處、僕は君にやらせたいのだよ。けれど、ポリー伯母さんが——ジムがやりたがつたのを矢つ張やらせないのだ。ね、だから僕だつて困るよ。君がこれをやり出して、もし如何いふ事か仕出來さうものなら。

「何だ！ 僕だつて、十分氣を付けるよ。まあやらせて御覽。あのね、——此林檎の心を上げらあ。

「うんそんなら——まあ止さうよ、ベン。心配なもの。

「では林檎を皆なやるよ。

トムは、外面不精／＼に、内心喜躍して、刷子を渡した。蒸汽船ミズリーが、日向で、せつせと汗を流して働いてゐると、退隱した技術家トムは、樹蔭の樽の上に腰を下ろし、兩脚をぶら／＼させ林檎を噛りながら、同じ手段でもつと人を引掛けやうと企んで居た。果して引掛かる者が多くあつた。ちよい／＼通り掛かる子供連は、始は、嘲り笑つても、皆止まつて塗つていつた。ベンが働き疲れた頃には、繕つてある紙鳶一枚で、ピリーが請負ひ、ピリーが倦きた頃に、ジョネーが死んだ鼠と其を吊り下げる紐を出して後を引受けた。其から次／＼と何人がか何時間かやつて、遂に午後

の眞中になつた。朝の内の貧乏少年トムは呻吟る程の寶持ちなつた。前に言つた物品の他に、石彈が十二、口琴の破れたのに碧ガラスの破片が一つ、糸巻製の大砲に、何の役にも立たぬ鍵、白墨の破片に、ガラス徳利の口、ブリキの兵士に、蛸蚌が二尾、疳癩玉が六つに片目の子猫、眞鍮の戸の取手に犬の首輪（但し犬はなし）、ナイフの柄と密柑の皮四片に破碎れた窓枠とが手に入つた。その間中、トムは友達に取巻かれて、ぶら／＼面白く遊んで、塀はといふと、一度どころか三度塗りが出来た。もしペンキが無くならなかつたら、トムは、村中の子供を皆破産させる事が出来たろうに。

トムは、人生はさう空漠でもないと思つた。不知の裡に彼は、人間行爲の一大法則を發見したので、即ち老幼の別なく、人をして物を欲せしむるには、其物を得難くさせるにあるのだ。トムも偉い賢哲であつたら、「人が爲なければならぬ事が仕事

で、爲ないでも宜い事が遊びなのである」との理屈を悟つたのであろう。しかし實際は、トムは、

忽ちの裡に金持になつたものだと思ひながら、伯母さんへ報告にと歩み去つた。

子供 の 衛 生

——このころ注意すべきことも——

醫學士 石 塚 保 吉

正月に關したる子供の衛生

正月は、年の始めで、大人にとつてもおめでたい時であります。殊に子供にとつては、一年中の最うれしい、最楽しい時であります。しかし、此よふこばしい好時節に、やゝもすれば、子供は健康をそこなひやすく、甚だしきは、非常なおめでたい時を、非常な悲しい時としてしまふやうな事があります。

これは、暮れのいそぎと、お正月の取り込みにまぎれて、自然子供に對する注意が怠られるからです。つまり、子供は、いそがしい大人の犠牲に

せられるのです。

少し大きい子供になると、お正月は實におめでたい。學校はやすみなり、御馳走は澤山ありといふので、自然生活が不規則に流れる、御馳走も種類を擇ぶひまがなくなつて、腸胃を害するのは、殆ど常例になつて居ります。

しかし、これではおめでたいお正月に、けちのつくわけであるから、お正月は特に衛生に氣をつけて、食物にしても、分量、種類など、よほど注意して載きたいものです。

正月の遊戯

また正月は、子供の遊戯が盛に行はれます。其

中、獎勵すべきものもあり、すべからざるものもあるやうです。男兒が風をあげ、女兒が羽根をつくといふやうなのは、運動にもなり、體力を養ふ事にもなるから、大に獎勵すべきですが、すこしく、かるたなど、室内に多人數相會するやうなのは、甚だ不衛生なものです。空氣はわるくなる、頭ばかりはたらいで、身體の運動が、これに伴はない、加之、食物が之に附隨してくるから、是等の種類は、全然避けて然るべきです。

寒胃に關する注意

寒くなると、皆よく寒胃かぜをひきますが、寒胃の豫防について、往々、世間の人が誤解して、あつ着をすれば、寒胃の豫防は出来るものと考へて居るやうです。

しかし、實は、あつ着は寒胃の豫防になるのではない、却つてあまりあつ着をすると、皮膚を弱くする恐れがあるのです。かつ、どんなに多く衣

服を着て、身體をつゝんでも、氣管の中へ吸入せられる空氣が冷たければ、容易に風邪をひくのです。

故に、子供などは、あまり寒い時には外出をさせないやうに、また、戸の開閉によく氣をつけて、寒氣の侵入を防ぐやうに注意しなければならぬ。是等の事によく注意すれば衣服はむしろ、うすくとも、寒胃をさける事は出来るのです。生後間もなき嬰兒などは、殊に此點に注意を要するのであります。嬰兒は外界に對する抵抗力が極めて薄弱ですから、寒氣にあたると直に寒胃かぜをひく、寒胃から肺炎にすゝむ、其次には死亡といふやうな不幸を見る事が多いのです。故に、戸の開閉にも十分氣をつけて、直接、外氣が嬰兒にあたらぬやうに注意せねばなりません。

また、朝夕寒い時には外につれて出ぬやうにするがよろしい。此時代には、衣服もいくらか多く着せねばならぬ、極寒い時には、ゆたんぼを入れ

る必要もある、衣服をあたゝめて着せる必要もあります。

幼稚園時代になるとあまり温袍させるのは、前にも述べた通りよろしくありません。特に虚弱な者は別として、普通丈夫な子供は、嚴寒でない限り、多少うす着にして、相當に寒氣に抵抗させるやうに、習慣をつけるがよろしい。

寒胃と入浴

これは、常にきく問題であつて、醫者仲間でも説がさまざまです。或は寒胃中入浴するのはよいと奨励する人もあるが私は、寒胃中の入浴は日本に於ては、絶體にわるいと申上ます。西洋の如く。屋内に防寒装置のよくとゝのふて居る處ではよいが、日本のやうに風通しのよい家の中では、入浴は寒胃の原因になる事が多いのです。

或は、湯であたゝまつて、直に寝るのは、寒胃の療法といひますが、これは大人にはよいが、幼児にはよろしくありません、襦袢の取りかへや、

大小便などの爲めに、中途で、寒氣にあたるおそれがあるからです。寒胃中、幼児の入浴は、日中最暖かい時がよいのです。

寒胃に對する家庭の手あて

これは、吸入が最よろしい。鼻加答兒咽喉加答兒は吸入で全治する事が出來ます。吸入に用ふる藥料は、通例重曹水の百倍、または食鹽水の百倍、或は此二ツを等分に混じたものを用ふるがよい。今一つは、首のまはりに濕布をするがよろしい。是等の手あてをしてもなほらぬ時は、是非醫師に見せなければなりません。殊に幼児は、一晚にでも大事に至る事がありますから、特に早く醫者に見せる事が大切です。

冷水摩擦

寒防の豫防として、近頃、冷水摩擦を子供に奨励せられて居るやうであるが、是は甚だ危険です。小學校の子供ならばまだよいが、幼稚園時代の兒童にはあまり過激で決してよろしくありません。

元來冷水摩擦は荒療治であるから幼稚園児には斷

じて行つてならないのであります。

幼稚園日記(一)

クリーン、ハーデイ女史著
田中 生 抄 譯

一九〇六年十一月——エヌ、セーグアイ幼稚園
は三人の子供を收容して開園しました。子供はも
う一人多く来る筈でしたが其母親が開園の日取を
間違へたので見えませんでした。私は第一木曜日
といふべきを次の木曜日と言つて了つたのです。

三人の内二人は初對面を平氣でやつてのける極
く氣の軽い子でした——おしよべり 惻巧で親しみ易くて饒舌
で完く遠慮なしでした。

子供等の言葉には随分面白いのがありました。

一番年長の子が今自分達が絲を通してゐる玉は自
分のものになるのでなくて皆先生のものになつて
しまうんだといふ事を他の二人に話して居ました。

三人は私の名を呼ぶのを非常にむづかしがりま

した。そして最初の一日は私は「小母さん」で通
されて了ひました。翌日も「いつもあな貴君の名を忘
れちまつて」といふ謝言ことわり付きで矢張「小母さん」
と呼ばれました。

此の幼稚園はボール教會所屬の或る小さい會堂
内に設けられてあります、教會には金曜日と日曜
日に祈禱會が行はれて。幼稚園用にする時は祭壇
の前へ幕を張つて、そして腰掛、椅子、跪拜筵等
はすべて見えない所へ押込まれて了ふのです。

子供等は此所こゝを私の住居すまひだと思つて居ます。子
供等は大概一つの室とそれから離れて少し小さい
室との二間の家か又は一つの室と寢室とを備へた
家か又は一つの室しかないのでも家と稱してゐる

所から通つて来るのです。

或日一番伶俐な子供が室内を注意深く見廻してゐましたが聴て

「ハーデイさんの寢床は何處にあるんだらう—

—ハーデイさんは夜何處へ寝るのだらう」

と尋ねました。

或日私が室の内でグル／＼めぐりをしませうと

いふと

「これは家よ、大きな家だわ」

といつて私が室といつたを訂正した子供がありません。

又ある時、床の掃除に就て話してゐると、子供は床と花とを感違ひして

「花ぢやない、床」

といつて笑ひました。

金曜日、子供は土曜日には来るのではありませんと話されたのに、次の月曜日には

「私達此所へ来たわ、けど貴君は居なかつたの

ね、何處へ行つてゐて？」

と不平らしく云つたりしました。

其の次の金曜に、土曜日には留守にしますと話して聞かせますと。

「何處へ行くの」

「遠くにある私のお家へ」

「それぢや扉を開けて置いて頂戴、私達来て貴君のおかへりを待つてます」

一九〇七年一月——初め二三週の間、私は自分の言を實行させるのに非常に骨が折れました。

極く簡単な「お立ちなさい」「お座りなさい」といふ様な命令も一々説明しくなてはならなかつたのです。思ふに子供等は動詞を用ゐて物事を吩咐けられた事は今までに無かつたのでしよう。又私の言語が子供にとつて不思議に思へたのかも知れません。私の方でも子供等の言語にはまつたく閉口させられて了ふ事が幾度もありました。

多くの日常の言語が非常に異つて話されました。初めの内はよく「最早お辨當を食べる時間だ

すか」といふ質問が屢々繰返されました、「まだです」と、答へると頭株のマガイは他の者に分る様にそれを説明してやるのが常でした。

貧乏人の子供と上流の子供とは言葉使ひが非常に違ひます。幼稚園へ来る様な小さい子供はまだホンの少ししか言葉数を知らず、そして新しい言葉を覚えるのは非常に困難な事です。たゞ發音するだけでもかなり骨が折れるのです。

子供等に新語を教へ込まうとすると、子供等は屢々その語の代りに自分が前から知つてゐる語で、意味などには頓着なしに發音のいくらか似てゐるをもつて來て發音します。

例へば私が教へたクリスマスの歌の中に「ひとせにこよなくうれしき日」といふ句がありました。此のイア(年)といふのが子供には發音が出来ない。或る子供はそれをステアと發音しました。

言葉が分らないばかりでなく子供は一般にまだ經驗が浅いので話をしてやるのは一大難事です。

目下收容してゐる八名の中で、たつた、二人が汽車へ乗つた記憶があり、海を見たものと田舎へ行つたものは一人もなく。誕生日といふことを知つて居る者は一人もありませんでした。

又子供等の母親も大抵その子の生年月日を判然いふには出産證明書を見なければ分らない向が多いのです。

お馬と鳩ぼつぼとわん／＼と兎馬が子供の知つてゐる限りの動物です。そして羊、山羊、狐、栗鼠、兎、豚鼠てんげんねづみの繪は皆、わん／＼だと言はれて了ふ。庭園用修道輪ガーデンローラーは自轉車だの茶壺だのと言はれる。但し子供等は家庭的本能は強くて。外套室の自分の掛釘とテーブルの席次とを苦もなく覺へて了ふますし、僅か三才の小さい子供でも一人でどん／＼お使に行きます。

西區(上流社會の家多し)の奥様連は此の幼稚園の子供の獨立的なのを見て驚くのが常です。

四才三ヶ月のいたづら者のおちよびさんが三才

六ヶ月になる相棒と一緒になつて母の室（母親は外へ仕事に出るので一日鍵が掛けてある）へ侵入して、入口の戸に楔子を塞つて置いてオートミール砂糖の食卓を開いて、それから瓦斯に点火してお茶を入れたといふ様なこともありました。

全體此の邊の母親は自分が饑えない範圍で子供に何でも惜氣なく呉れて了ふ風があります。

或日私がサンドキツチを食べてゐると戸を叩いて子供が來ました、

「私達、先生の側へ來たくなつたので來たのです、ホンの少しの間此所こゝにゐるだけ」

私は疲れてゐました、併し如何して子供達の入つて來るのを拒こはめましょう。

サンドキツチは忽ち子供の好奇心の焦點になつて細かに研究されました。ビートルートのことを「これはジャムだと或る子が言ひ、果糖フクトは糖蜜と呼べました。その翌日マギイは言ひました。

「私阿母さんに先生はお晝にお辨當ばかり食べ

てお茶を上りませんと話したら阿母さんは先生にお茶を差上げますから夜私の家へお出下さる様にと言ひました」

貧民窟では食事イールをするといつても主なる食物といつたらお茶、濃いお茶位なものです。一般に食事に使ふ所の麩包ほんの薄片やバター麩包やジャム麩包などはないのです。食物は些ちひとも規定きまりが無く與へられ、子供等は何か欲しくなると欲しいと云ふ、そして若し何か有合せれば何時いつでもおかまひなしに與へられるのです。

或る母親が自分の子供の病氣が全快して食慾が進むことを喜んで話して

「食物たべものは決してあの子の手を離れたことがありません」

といつたことがあります。詰り何時も食物を手にかけてゐてそれを噛つてゐるといふ意味なのです。

もう少し注意深い母親達は其子供に御馳走としてスープを與へます。併しブツディングは彼等

には贅澤すぎるのです。

或日カーンゲートを上つてゐた時、同情心の深いマギイは私に

「何處へいらつしやるところ」

と尋ねました。

「御馳走を食べに家へ歸るところです」

同じ日の後刻にマギイと又會つたら

「御馳走を上つて來ましたか」

「ええ」

「何を上りました」

「お魚」

「私も時によると夕食の時（母親が歸つて來た時食べるので一日中一番量の多い食事）お魚を食べることがあるの、お魚と一緒にお茶も召上つて」

「いゝえ」

「自家でも時によるとお茶が切れてゐて、それを買ふお金がないとお魚だけでお茶は飲まない

のよ」

と云ひました。貴君ばかり貧乏なんぢやないといふ意味を汲ませるつもりらしいのです。

私は子供達が私を自分達の仲間の一人の様に思つてゐるのが嬉しくなります。

或日私が新調の外衣を着て行くと

「誰がそれを呉れて」

と子供が云ひました。何でも目新しい物を見ると我慢しきれなくなつてよく這麼事を訊きます。

「私が拵へたのです」

「嘘！」

「いゝえ、本當に私が拵へたのです」

「ぢや何で拵へたの、貴君の阿母さんのスカートで？」（外衣の物は淡青の織物であつた、而かも母は寡婦でした）

カーンゲートでは滅多に新しいもので衣服を作られません、大概は古手で買ふのです。



フレールベル自傳 (第一回)

(マイニンゲン大公に宛てたる書翰) 倉橋惣三 譯

一、出生

私は一七八二年四月二十一日シユワルツブルグ、ルードルスタツド小國のチューリンギヤ森林地方なるオーベルワイスバツハ村で生れた。

私の父は其地方に於ける主僧即ち牧師でありました。(父はヨハン、ヤコツプ、フレールベルと言つて舊派のルーテル新教會に屬してゐましたが一八〇二年に亡くなりました。)

私は惱ましいいこせこせした境遇に身を處して、人生の苦闘の中に早くから捲込まれて了ひました。そして淺い經驗や乏しい教育で種々と思ひ煩ひました。

私が生れると間も無く母は漸次弱つて行きました。そして九ヶ月の間私に添乳して身罷つて了ひました。母の死は私に取つて一大打撃でありました。それは私の周圍の人々や私の成育上に大なる影響を及ぼしました。母の死は私の全生涯に亘る命數を多少固定したやうに考へられます。

六七の村々に散在してゐる五千の人々を救濟するのは、係つて悉く父の上にあります。この仕事は牧師としての職責を完うすることに就て道念の固かつた私の父の如き活動的な人にさへ大變骨の折れることでした。屢々勤行する様になつてからは尙更さうでした。

この他私の父は大きな新教會の建物たものを管理することを引受けて家庭や子供等からは漸次離れて行きました。

私は召使の手に任せられました。けれども父が自分の仕事に夢中になつてゐたもので、すから召使は私よりも兄達の世話ばかりしてゐました。併しこの事は私に取つては勿怪もつりの幸なのでした。この事は後に起つて來る事柄と共に、家族の人々殊に現今でも私の生涯に大關係のある兄弟に對して、深い友愛心を抱く原因となつたらしいのです。

私の父は村の牧師としては非常に評判も善かつたし、學識もあり經驗もあり不斷の活動家でありました。けれども私は幼年期

に於て父から離れてゐた結果、生涯父とは親まな
い様になつて了ひました。

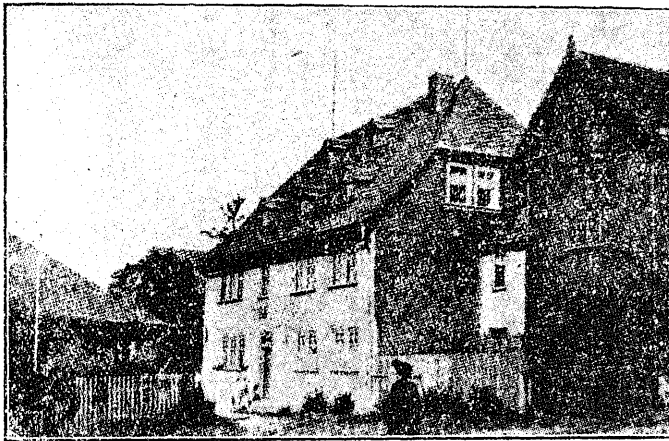
斯くて私は母が無かつたと共に實際は父もなかつたと同様です。

二、第二の母

斯うした事情の下もとに私は四歳になりました。私の父は再び妻を娶りました。私には第二の母が出來た譯わけなのです。

私の心はこの時母の愛——親らしい愛——の缺乏を深く感じてゐたに違ひありません。何故なぜならば最早もつ四歳にもなつてそろ／＼物心がつき始めからなのです。

私は新來の母に溢るゝばかりの純なる感情と敬けい虔けんなる愛とを以て事へたことを記憶してゐます。



所場の生誕ルベール

斯うした心掛は私を幸福にし、私の天分を發達させ、私の心力を強くして行きました。何故ならば繼母は私の愛に對して優しく報いてくれたからです。併しながら此の幸福は長續きをしませんでした。間もなく私の繼母は自分の腹を痛めて一人の男の子を贏得けました。而してそれからといふものは繼母の愛は全く私を離れてその實子の上に移つて行きました。そして面倒を見て貰はれないばかりでなく、口汚く罵られたり虐待されたりする様になつたのです。私はまつたく頼りない心持を抱かされる様になつて了ひました。

私はこゝで是等の事情を記さなければなりません。それも詳しく述べる必要があると思ひます。何故ならば私が幼くして自己を觀察したり批評したりする性癖を持つに至つた事や、又幼くして他人との友誼を斷つに至つたことの主なる原因が是等の事情の内に潜んでゐると思ふからなのです。

繼母に子供が出來てから間もなく、やつと幼年

期に入つたばかりの私にむかつて話し掛けるのに、思やりのある親み深い「坊や」といふ言葉を使ふのを止めて了ひました。そして第三人稱を以て私を呼ぶ様になりました。そしてこの三人稱の「あの子」なる呼び方で呼ばれると、呼ばれた者は親み難い疎々しい感じを與へられるものなのです。斯くて繼母と私との間には越ゆべからざる大なる溝渠が出來て了ひました。

私は既に全く孤獨を感じ私の胸は悲みを以て満たされて了ひました。

心の卑しい人々が、此の時の私の感情や心持に乗じて、私を繼母から背かせ様と試みました。併し人情から云つても道理から云つても開廢事は出來る筈のものではありません、私は佛然として是等の人々に反感を抱き、以後は成丈是等の人々を避ける様に努めました。

斯くて私は幼年期から高尚な清純な内的生活を認識する様になり、全生涯に通ずる適當な自覺と

誇るに足るべき道徳上の諸徳との基礎を得ました。

三、内氣な子

諸の誘惑が時々やつて來ました、そして其度毎に私は苦みました。私は極く詰らぬ事しか出來ない人間であると思はれ、尙その上私は卑しい行爲をする者であるといふ様に決められて了ひました。人々は私を斯く品評して了つて、其品評の妥當を缺く事や不眞實なる事に就ては尠^{すく}も考へない様子でした。

そこで私は少年期の初期を一人淋しく沈み勝ちに暮す様になり、四圍の事情に反對して自己に就て考へたり、内部意識を研究したりする様になつて行きました。それから又兩親の家の位置は私の人格の構成及び發展に關して著しい影響を與へました私の家は他の建物や石牆や籬や柵に依つて密接に取圍まれ、そして其上尙外庭や圍場や菜圃に依つて圍まれてゐました。私は是等を越えて外へ

行く事は禁せられてゐました。

住居の左右の建物と、前にある大きな教會堂と、後の小高い丘の上に廣がつてゐる傾斜原とを除いては他に眺める物とはありませんでした。永い間私は晴々する様な景色も眺めずに暮らしてゐたのです。併し私は常に頭の上の空を仰ぐ事を忘れませんでした。高原國では空は多く透明で輝いて居りました。そして清い新しい微風は身のまわりに戰いて居りました。あの透明な空と清純な空氣とが與へて呉れた印象は今でも生々と私の心の内に残つてゐます。

私の知解は斯ういふ譯^{わけ}で極く卑近な物象にのみ限られてゐました。

しかも、若木や花を持つた自然界は私の見たり理解したりする事の出來る範圍で直ちに私の觀察や省察の對象となりました。

私は間もなく父の道樂であつた園藝の作業を手助けしました。そして是が爲め私は多くの不易の

覺りを得ました。就中自然界に於ける眞の生命の自覺を私は一番痛切に感じました。私は後に私の記述を此點に向つて進めて行きませう。

當時の私達の家庭生活は私に瞑想と反省の機會を度々與へました。

家内の事は常に改良に改良を重ねられて居りました。兩親ともに極端に活動心に富んでゐて、物ごと秩序立つてゐるのを喜び、働ける丈働いて住居を改善しやうと決心して居りました。

私も自分に出来る事は何でもして兩親を助けねばなりませんでした。これがため間もなく私は氣力も確固しつこして來たし經驗も増して來たといふ事が自分で分りました。

氣力と經驗の増すにつれて、私は遊戯をしたり兩親の手傳ひをしたりすることは、却々價値のあるものであるといふ様なことを悟りました。

四、家庭の感化

自然を友の晴れやかな生活と外面的な家庭生活

の事は暫く置いて、私の家全體や家族の者に關する内輪の模様を記して見ませう。

私の父は舊派の神學者で信仰を智識や科學より貴いものとしてゐたのです。而かも尙父は時勢には遅れない様に努めてゐました。それで父は自分でいゝと思つた雜誌を二三種取つて甚とん麼記事が出てゐるかと思入りに調べてゐました。これあるがために我家の人々がしてゐた様な古風な眞面目な基督教的な生活も尠からず高められ開發さるゝのでありました。

毎日朝と晩——御祈禱をする日曜日でも——平凡な宗教禮拜のために家族の者は残らず集りました。清い瞑想に耽り樂む時ゾリコーフェルやヘルメスやアングールやスツルム等は私達の思ひを私達の内心の核の上に轉じさせ、私達の身の内の靈的生活を鼓舞し開展し崛起させました。

斯くて私の生活は早くから自然の感化、有用な工作の感化、宗教的感情の感化等を享受しました。

即ち各人類に通ずる原始的な自然的な傾向が、幼芽として私にも優しく養はれてゐたといつた方が面白いと思ひます。

私は後に説く所の人の性質に就ての私の意見に關し、又私の唯一の天職を説明するために、私は其頃深い感激を以て、善良にして勇敢なる人にならうと幾度も決心したことを記さねばなりません。併し私の此の確固たる内心の決意は、外面に現れた私の生活とは著しい相違を示して居りました。

私は若々しい勢力に充實し意氣揚々として居りました。そしてその元氣を如何したら適當に調節して行けるかといふことを知りませんでした。私はこの調節の度を缺いた爲めにあらゆる困難に遭遇しました。

私は自分の周圍の物象を調査し理解するためには淺墓にもそれらの物象に向つて屢々破壊を試みました。

五、女學校の生徒

私の父は餘り多くの仕事を持つてゐた爲めに自身で私を教育する暇はありませんでした。且又父は私に一度本を讀ませてみて恐しく骨を折つた経験があるので、私を教へるのに厭氣がさしてゐたのであります。これが爲め讀書は私に取つて非常に難事となつて了ひました。

本が讀める様になると私は村の學校へ上げられました。

父が村の學校長等即ち宗教學校長と女學校長とに親しく其の學校の様態を聞いたり、又夫等の學校の教育の成績等を判断したりした結果、私は女學校へ入れられることになりました。

此の選擇は校内に横溢してゐた清麗、靜謐、理性、秩序のために私の内的資性の發達の上に異常な影響を及ぼしました。否一步を進めていふならば、私の様な子供には女學校が丁度相當だつたのです、これを證するために私がこの學校へ入學した當時のことを書いて見ませう。

當時は教會と學校とは一般に緊密な相互關係を保つてゐました。私の入學した女學校も矢張教會と關係がありました。學校の生徒は教會に於て特別の席を供給されて居りました。生徒は教會に出席を強ゐられるのみならず、特に設けられた月曜日の課業時間には前日祈禱會に出席した證として、牧師が説教に用ゐられた聖書ひとの一句を教師の前へ出て暗誦させられるのであります。

是等の諸章中兒童に最も適當と思はれる一章が小さい生徒の暗誦の材料となりました。これが爲めに上級生の一人が一週の間毎日時間を限つて小さい生徒に一句づゝ繰返してやらねばなりませんでした。小さい生徒等は起立して一句宛上級生の跡を跟いで、全部空で覚えて了ふまでは鸚鵡返しをさせられるのであります。

私は月曜日に入學しました。その週の暗誦用に選ばれたのは「爾曹、先づ神の國を求むべし」の一章でありました。私は毎日謐靜な莊重な幾分か

單調な子供等の聲で繰返さるゝ是等の言葉を聞きました。先づ一人の子供が云つて次に全級の兒童がそれについて唱へるのであります。

この暗誦に用ゐられた經句位、私に強い印象を與へたものは前後に絶無でありました。實際その印象は、當時特殊な調子と呼び方で語られた一語一語を、今でも心の内に生々と思ひ浮べる事が出来る位強く且つ永久的であります。そしてこの事は今から數へれば早や四十年許も昔の事になつてゐます。當時の單純な少年の心もこの一語がその生命の基礎となり救濟になるだらうと思つたに違ひありません。又この一語は少年の心に後年活動努力の人に不撓の勇と提進的、常念的、欣然的なる犠牲の源泉とを附與するものであるといふ確信を抱かされたに違ひありません。要するに其學校へ私が入學したのは高級な靈的生活に於ける私の誕生であつたのであります。

○編輯者より

○先づ新年の始めに當つて、全國讀者諸君の健康を祝します。

○本誌本年度の表紙は、意匠を杉浦非水畫伯に、題字を岡田起作先生に願ひました。

○本號から掲載し始めました『フレーベル自傳』に就て一言いたして置きます。之は自傳とば申しますけれども、別に一個の著書として書かれたものではありません。フレーベルが知遇を蒙つたマイニンゲン大公へ宛てた長い書翰の連續が即ち此の原文なのであります。そこで文脈にも措辭にも、随分前後したような處、こぐらかつた様な處があります。若しフレーベル傳の事實の記載ならば、ずつと書きかへた方が分りよくなると思ひます。しかし、其の時の氣分、筆の勢、殊に書いて居る中に湧き出た感想などの中に、却つてフレーベルのよく現はれて居る處が多くあります。よつて、成るべく其のまゝに、なまじ細工を加へないことにしました。たゞ、多少讀みよくする爲に、節を切つて小見出しだけつけました。之は原文には勿論ないので、或は蛇足かも知れません。

○もう一つ本號から連載します『保育入門』に就ても、一言申し上げて置かなければなりません。入門などゝ古めかしく可笑しい様ですが、詰りは保育に關するいろ／＼の問題の概要を、多少系

統だつた順序に簡單にまとめて見て、幼稚園教育初學の人々のための手引になつたらばといふ考へです。従つて、保育上の特殊問題や、深入りした論究などは一切此の中に入れません。たゞ主要なる要項を集めて、保育の輪廓をあらはして見度いと思ひます。

そこで、編者から讀者諸君にお願ひがあります。それは、此の『保育入門』を讀んで見て下さる中に、御意見の違ひとか、問題の落ちて居る點とか、斯ういふ順序に説明した方がよからうとかいふことがありましたら——澤山あらうと思ひますから、是非御注意なり、御意見なりを頂き度いことです。編者が此の稿を本誌上に載せますのも一つに、此の希望のためでありまして、諸方からの補正によつて、なるべく私見に偏しない、一般的な保育概論を得たいと思ふからであります。此の點は、深く切望懇請いたして置きます。

○『幼稚園日記』は、英國のり、リン・ハーデー女史が自分の實驗を集めて一冊の書とし、つい近頃公にしたもので、露骨に譯せば貧民幼稚園の日記です。我國に是非澤山起らなければならぬ此の事業に就て、海外の同志の實驗談を聴くのも興味が多いこと、思つて、田中君に譯して貰ひました。之れが我國で出版せられた我國の人の日記なら、尙更どんなに有益であらうと思ひます。

常備せよ——ホシ小兒専門藥



ホシ小兒下痢止
 ホシ小兒風藥
 ホシ小兒胃腸藥
 ホシ小兒下劑
 ホシ小兒祛痰藥
 ホシ小兒虫藥

各特約店及市有名藥店にあり

有樂町三丁目一番地

星製藥株式會社

電話新橋區新橋五番 振替東京區〇五區新橋

●小兒の體質と大人のそれとは違ふから藥も大人と小兒とは區別しなければならぬ
 ●政府の報告を見よ、小兒は一番病氣に罹り易い又死亡率も一番多いではないか
 ●然るに是迄完全なる小兒専門藥のなきは政府も民間も共に遺憾とする所である
 ●賣藥改良の魁たる星製藥株式會社は茲に率先して六種の小兒専門藥を發賣するに至つた
 ●ホシのクスリは能く効く、クスリはホシに限るとの公評あり、世の親達よ明日と云はず本日直に之を求めて愛子の健全を計られよ
 ●各美罐入一個十錢、六種箱入六十錢
 ●病原療法、藥用法、其他注意事項等を説明せる小兒圖書を添ふ

謹賀新年

昨年新築中は往々御送品遅延仕御迷惑相掛け候段奉万謝候本年度は館員一同大奮勵精々御便宜相計り可申上候間倍舊の御愛顧奉願候 謹言

大正三年一月元旦

恩物製造發賣元

東京 九段

フレールベル館